

Julien Green における「他者」

福 田 忠 郎

〔I〕

わたしたちは前に Green のロマンのほとんどがその構造において中心的存在と周辺的存在に単純化し得ること、ロマンというきわめて具体的世界の中で前者は les Adolescents, 後者は la femme âgée という表相をたえず見せていること、両者は血縁関係にあることなどを指摘して来た。

中心的存在の意識の中にその表相の正確な反映として、たとえば「閉じこめられる」という共通の意識が見出されるとしたら、そのことも含めて複数の les Adolescents は様々な皮相な相違を越えて、その共通性をおして唯一の存在に収斂されている。中心的存在が、そのように収斂され得るなら、様々な周辺的存在もそれに対応しないであろうか。彼女たち、la femme âgée は、les Adolescents にとって母か姉か叔母かであるが、すぐ気づかれるように、母、姉、叔母はアナロジーにすぎない。そしてまた彼女たちの意識はいつも les Adolescents の「……られる」という感情を裏返しにしたものであった。これらの共通性に注目するならばこの周辺的存在も唯一の存在であろう。l'Adolescent を装った「…られる」という意識の前に現われるこの存在は、彼と血で繋っていなければならないとすると、おそらく「母」にちがいない。少くともそう仮定することは許されるだろう。だとすれば唯一の l'Adolescent はその「母」にとって「子供」になるのだが、事実しばしば l'Adolescent と la femme âgée の関係は「母」と「子供」の関係として見出される。中心的存在と周辺部存在という構造上の抽象的關係が「子供」と「母」というきわめて肉感的關係にまで還元されることはたしかだ。

しかし、周辺的存在としての姉や叔母をそして時には父——M. Mesurat

まで「母」に還元したとき、除外されるべき存在があることも確かだ。Emily は Frank Stevens と結婚したが、そのことから示唆されるように、この除外された存在は、この Stevens も含めて、中心的存在の les Adolescents にとって《l'amour ou plus exactement ce que les héros greeniens appellent l'amour¹⁾》の対象となる。それは当然のことながら「子供」——l'Adolescent とは血の繋りはない。この新たな周辺的存在は「母」と区別する意味で、他者と呼ばれよう。わたしたちはすでに「母」についてなかば以上語っているからには、以下の記述の中心は、この他者、もっと正確に言えば中心的存在——「私」と言うことがあるかもしれない——におけるこの他者の問題である。

1) Antoine Fongaro: "L'existence dans les romans de Julien Green" p. 159

〔Ⅱ〕

Les Adolescents はどのように自分たちの状況を把握していたらうか。

あのスキャンダルな幼ない子供たち、孤独な les Adolescents、彼らは、閉じこめられ、ねらわれていた、そう感じていた。一種の claustrophobie. 《La claustrophobie, c'est à dire le désir de s'évader de cette prison, la soif, le rêve de liberté¹⁾》

彼らが閉じこめられている家・部屋は、それ自体ある内的空間を有しながら、つねにその外側に拡がるもう一つの空間を予想している。

《Furtivement il (Guéret) jetait des coups d'œil par la fenêtre... Une mince plaque de verre le séparait de l'air frais et vif... Une vitre, il n'en fallait plus pour qu'il se sentît prisonnier.²⁾》

この Guéret のように、窓の外に見える世界が彼らをいっそう囚われ人と感じさせている。窓がもう一つの世界の存在を告げている。囚われ人たちはいつも窓の方へひき寄せられるのではないだろうか。

《Beaucoup de personnages de Julien Green sont... tout en fenêtre³⁾》

《Sans cesse elle (Emily) regardait par sa fenêtre guettant les beaux jours⁴⁾》 《Par habitude, elle (Elisabeth) alla se porter près

d'une des fenêtres.⁵⁾》

ことに Adrienne は窓にとり憑かれています、《Le moindre bruit dans la rue…l'attirait aussitôt à la fenêtre.⁶⁾》姉の Germaine に家出をすると打ち明けられたとき《Le cœur d'Adrienne se gonfla. Elle pensa immédiatement à la chambre qui serait libre, à la fenêtre où elle pourrait s'asseoir toute la journée.⁷⁾》

しかしこの囚われ人たちにとって可能なことは、その窓から見ることだけではないだろうか。

《Certes, il n'y avait que quelques pas de la villa de Charmes au pavillon blanc, mais ces pas séparaient des mondes.⁸⁾》Adrienne はこの距たりをどうすることもできず、《Il regardait par la fenêtre comme s'il guettait la venue de quelqu'un⁹⁾》という (Daniel O'Donovan) ように、窓から la villa Louise を眺めながら、Maurecourt が姿を現わすのを待っている。Elisabeth もまた研ぎ屋が窓の下を通るのを待っている。彼らは窓に寄りながら待つばかりで、それ以上のことはできない。

窓そのものの本質があらわになる。窓は見るという一つの機能を果してはいるけれど、家の壁に嵌めこまれてる以上、それは家に捕えられている。

窓は、囚われ人の眼——それも固定した、動かない眼であろう。そうであっても窓は、閉ざされ世界——家・部屋を開かれた世界へ結ぶ唯一のきずなであり、出発点なのだ。窓から投げられる眼ざしが、開かれた世界において見も知らなかった他者を把えるだろう。眼ざしが、この囚われ人の「私」と他者とを出会わせる。

窓を眼ざしに代えるなら、Green のロマンのいたるところで、(窓も含めて) この眼ざしが見い出される。

《Elle était au bord d'une route, les bras chargés de reines-des-prés. Une voiture passait tout près d'elle; dans cette voiture un homme lisait et, relevant les yeux, lui jetait un regard à la fois profond et distrait: c'était Maurecourt.¹⁰⁾》この眼ざしが Adrienne

にとって 〈l'instant mystérieux où elle avait pressenti que sa vie allait changer¹¹⁾〉となり、彼女が囚われの身であることをはっきり告げ知らせる。

Guéret は、自分の方に近づいてくる Angèle を口もきけず食い入るよう見つめている。

〈Elle était vêtue d'un corsage blanc qui dégagait son cou et ses bras. Un tablier blanc couvrait sa jupe. Le jeu merveilleux des plis et de l'ombre imprimait à l'étoffe les lignes du torse, des membres¹²⁾〉

Elisabeth がすった一本のマッチの小さな炎が真暗闇の中から突然 Serge を浮かびあがらせる。

〈Un garçon d'environ dix-sept ans dormais dans une de ces attitudes à la fois tragiques et nonchalantes par lesquelles le sommeil s'apparent à la mort...Jamais elle n'avait vu quelqu'un d'aussi beau que ce dormeur...Puissant et doux, le grand corps couleur d'ambre brillait par les trous des ses guenilles.¹³⁾〉

この眼ざしを注がれる他者は、Emily における Stevens, Adrienne における Dr. Maurecourt にはじまって 〈Serge dans Minuit, atteint une perfection quasi symbolique¹⁴⁾〉と言われるように、美しさに光り輝く裸体にまで達している。

〈La chair doublement dorée, par sa couleur propre et par la carresse du soleil, et la plénitude des formes lisse le montre.¹⁵⁾〉これは Denids の従兄, Claude についての記述なのだが、この美しさは〈la statue d'un dieu grec¹⁶⁾〉のもつ美しさなのだ。事実 Serge と同じように身動き一つせず眠っている Claude は Denis の眼にこんなふうに映っている。〈Un drap s'enroulait autour d'une de ses jambes, froissé et plissé comme ces étoffes que les sculpteurs grec tempaient dans l'eau avant de les appliquer sur les membres de leur modèles.¹⁷⁾〉

眠っているがゆえの不動性も含めて、眼ざしの対象としての、この充実

し、すべすべした、完全なまでの肉体は、彫像のあの冷たさをもっている。Hedwidge の夢の中で彼女の恋の対象である Gaston Dolange は彫像と結び合わされている。《Il était nu devant elle. Son corps brillait pareil à celui d'une idole.¹⁸⁾》

眼ざされる裸体は冷ややかな彫像に似ている以上に彫像そのものなのだ。

《Près de vingt statues attendaient mon regard, rangées contre un mur noir... Une émotion vague et puissante me souleva devant ces dieux qui ne me voyait pas. Leur beauté me foudroyait.¹⁹⁾》と語っている Denis や、全く反対に 《deux grandes statues de plâtre qu'il évita de regarder parce qu'elles étaient nues²⁰⁾》の前を急いで通りすぎながら 《Je déteste les idoles.²¹⁾》という Joseph、彼らの反応は、逆に 《ce monde de plâtre s'animât d'un coup.²²⁾》ということがあり得るかもしれぬことを暗示してはいないだろうか。

この彫像にまで行き着き、それに象徴される他者は、それを見つめているものにとってどのような存在であったろうか。

この新たな他者に、この「私」は囚われの身であってみれば近づけなかった。その距りは、この眼ざしの対象が禁止されたものであることを意味している。見る事が可能であっても、眼ざしが形づくる一つの距たりにはすでに禁止が含まれているのだといえないか。Joseph が裸像から眼を逸らすのはそれが禁止されているからだし、《La félicité païenne du corps exalté apparait comme incarnation du mal²³⁾》であってみれば、Denis の畏怖のまざった歓喜は、その禁制を犯かしたことからひきおこされる。Wiefred の中でこの Denis と Joseph がからみ合っている。

《Il était dans le péché mortel jusqu'aux yeux et vraiment la femme (de de bronze poli, à peu près nue) est belle. Elle brillait. On la touchait du regard... Regarder était une sorte de bonheur auquel se mêlait de la souffrance²⁴⁾》

裸像への眼ざし、禁止、罪・悪の結び目には「母」がいる。《Blanche (la mère d'Elisabeth) lui disait ne pas regarder la statue en lui expliquant qu'elle n'était pas convenable²⁵⁾》

しかし今 Elisabeth は、その禁止されていた《une femme nue, avec des ailes de papillon》を見ることができよう。この禁止がとけるのは母の Blanche が自殺してしまったからである。もはや Elisabeth の眼ざしを遮ぎるものはない。彼女は自由であり、《Elisabeth se penchait sur le visage dont elle effleurait les joues brunes...par un geste d'une sensualité innocent, toucha du bout du doigt la face toute chaude de sommeil.²⁶⁾》あの裸像への眼ざしは Serge へのその前触れであり、この眼ざしにはまだ距りがあるかぎり、それはそれでまた今可能になった触れることへの前兆になっている。

「母」の死からもたらされたこれらのことは、禁制を犯してまで裸像に眼を注ぐことの裏側にはりついている「母」から逃れて自由でありたいという願いから遠くはない。この願いはすでに述べたように Green のさまざまな作品の中でも“Adrienne Mesurat”においてもっとも強くはっきりと表現されていた。Adrienne は姉を追い出し、父を階段から突き落した。いずれにしても囚われ人と窓の外の世界とをへだてていた壁が崩れ落ちたことは間違いない。

囚われ人の「私」と窓の外その他者との距りは消え失せて、新しい関係が、すなわち眼ざし以外の関係が可能であるように思われた。動機はどうかあれ Emily と Stevens の結婚という事実とそのことが象徴されている。

- 1) A. Fongaro, op. cit., p. 55
- 2) “Léviathan” (Livre de poche) p. 38
- 3) André Blanchet: “La Littérature et le Spirituel” p. 174
- 4) “Mont-Cinère” (Livre de poche) p. 230
- 5) “Minuit” (Livre de poche) p. 148
- 6) “Adrienne Mesurat” (Livre de poche) p. 46
- 7) Ibid., p. 133
- 8) Ibid., p. 125

- 9) “Le Voyageur sur la terre” (Livre de poche) p. 97
- 10) “Adrienne Mesurat” pp. 107-108
- 11) Ibid., p. 108
- 12) “Léviathan” p. 47
- 13) “Minuit” pp. 318-319
- 14) Jean Sémolué: “Julien Green ou l’obsession du mal” p. 40
- 15) 16) Ibid., p. 57
- 17) “L’Autre Sommeil” (Oeuvres complètes) p. 16
- 18) “Malfaiteur” (Plon) p. 180
- 19) “L’Autre Sommeil” p. 35
- 20) “Moïra” (Livre de poche) p. 48
- 21) Ibid., p. 53
- 22) “L’Autre Sommeil” p. 35
- 23) J. Sémolué, op. cit., p. 55
- 24) “Chaque homme dans sa nuit” (Plon) p. 13
- 25) “Minuit” pp. 87-88
- 26) Ibid., p. 320

〔Ⅲ〕

結論をはじめに言えば、この中心的存在と周辺的との新たな関係も否定的でしかない。

《L’idée seul qu’il était venu dans la maison lui semblait étrange et presque terrible. Au lieu de la rapprocher de lui, ce souvenir l’en éloignait. Elle n’avait osé le voir lorsqu’il était venu,¹⁾》

閉じこめられていた Adrienne にとって Maurecourt が《un homme qui, d’une parole, pouvait la rendre heureuse pour toujours²⁾》であった。そのことを考えてみると、たしかに彼女のこの反応は奇妙だ。この他者を前にしての奇妙な反応は、Maurecourt を遠去け姉の後を追うかのように旅に出た Adrienne が Dreux の夜の街で出会った若い労働者を前にして、よりはっきりとくりかえされる。Adrienne はその青年に後をつけられている。《Elle se retourne brusquement, le dos au mur et souffla: 《Allez vous-en!》…《De quoi avez-vous peur?》demanda-t-

il. La main d'Adrienne se crispa sur son parapluie... «Je ne voulais pas vous faire de mal.», dit-il. Et il s'en alla. Elle l'entendit qui s'éloignait en sifflant une valse à la mode... Dans sa solitude quelqu'un était venu à elle et elle l'avait repoussé. Était-ce parce qu'il l'avait abordée?... Elle remonta la ruelle dans la direction qu'il avait prise... et marcha plus vite... Elle murmura: «Si jamais il se retrouve sur mon chemin, il me parlera et je répondrait.» ... En courant elle le rattraperait peut-être.³⁾»

この Adrienne の他者に対する二つの例のうちに、Green の作中人物たちの——おそらく Green 自身の他者との関係における根本的な構造があきらかにされている。ここでも彼らは絶対的な主体という位置に固執している。Adrienne が Maurecourt や青年を拒否するのは、彼らが向うから近づいてくるその時彼女は客体にならざるを得ないからだ。同時にこの自分の他者性を拒否しようとして意識と密接に関連し、それを別の意味で確認するような他者に対する在り方があらわになっている。

A. Fongaro や J. Sémolué が指摘していることだが、Green の人物たちには他者に対する《une espèce de timidité maladive⁴⁾》がある。この病的意識が、この可能と思われた他者との関係の出発点であり、また帰結点ともなる。この意識はある意味で半分以上、この「私」の前に現われる他者がそれ自体としてどのような存在であるかにかかっている。(このとき他者は微妙に二分されるのだが、そのことについては以下の記述をとおしてあきらかにされよう。)

«Les rapports avec autrui y côtaient près toujours l'équivoque, s'agirait-il d'une main, d'un souffle.⁵⁾»

このどこかいかわしいところのある他者は、距離をおいて眠ざれるのではなく、この「私」に手で触れ、生暖かな息を吹きかける。Adrienne に近づいてきた青年の「唇は濡れて光っていた。」《Chaque personnage de Green a non seulement des traits physiques nettement caractérisés, mais une densité, un ton de voix, et comme un parfum spécial:

M^{me} Legra sent très fort le réséda; autour de M^{me} Pauque flotte un parfum de lilas⁶⁾》と P. Brodin は述べているが、皮肉なことにこの他者が、あの眼ざしの対象としての彫像のような裸像、いわば非人間的な他者から離れて、生暖かい肉体をもったきわめて現実的な存在であればあるほど忌避される。このような他者に対する嫌悪感は Adrienne の病気の姉 Germaine に対する反応や Emily の祖母 Mrs. Elliot への態度のうちにいっそうはっきり表わされている。Adrienne は姉が家を去った後、その部屋に上がってみようかと考える。《Mais, l'horreur de la contagion la fit hésiter: depuis que Germaine lui avait confié qu'elle était mourante, Adrienne ne pouvait souffrir la pensée de toucher un vêtement.⁷⁾》Emily は死んだ祖母に最後の抱擁をしなければならない。《Elle domina sa terreur et, se penchant sur le corps, elle appliqua les lèvres a l'endroit du front... Elle ouvrit la porte et sorti. Dehors, elle prit son mouchoir de sa poche et s'essuya la bouche plusieurs fois. avec force.⁸⁾》

生暖かな息・手・身体は汚染されていて、それに触れたり、触れられたりすることは死に至る病いに感染することであろう。この忌しい他者の属性に匂いも付け加えられねばならない。Green の作品においては匂いはいつもいかがわしいものと結びついている。réséda の匂いを撒き散らしている Mme. Legras は、ひとりぼっちになった Adrienne の唯ひとりの話相手になるのだが、やがて《une femme perdue》, Adrienne からいわせると《sale chienne des rues》であることがあきらかになる。lilas の匂いを漂わせている Mme Pauque は死を表わしている⁹⁾。Joseph が押し殺さねばならないことになる Moïra も《une très légère odeur de lilas》を漂わせている。《Soudain le parfum dont elle (Moïra) s'était couverte flotta jusqu'à lui (Joseph)¹⁰⁾》というように、匂いも、生暖かい息同様、汚染を思いおこさせる toucher という観念と同義語なのだ。Green 自身《Personne ne devait me toucher¹¹⁾》といているように、彼には Adrienne や Emily 同様、触れる (toucher) ことに対する本能的な

嫌悪感——恐怖感といってもいいかもしれぬものがある。彼にとって《*un contact charnel*¹²⁾》はどうしようもないほど忌しいものにちがいない。

Elisabeth が眠っている Serge に触れている様子をもう一度思い出していただきたい。はじめ彼女は髪、毛で、それから指、先でそっと触れている。Denis がやはり眠っている Claude に触れる様子はもっと微妙だ。《*Je m'agenouillai sans bruit près de lui et le regardai; puis en me penchant un peu, je fis passer mon ombre sur ses joues et sur sa bouche, et cet attouchement mystérieux me parut plus étrange que tout ce que j'avais pu rêver.*¹³⁾》

Elisabeth のおずおずしたためらいがちな様子、Denis の(接触とはいえない)影による触れ合い、これらの触れ合いともいえぬ触れ合いはむしろ触れることへの抵抗感を確認しはしないか。それにこの触れられている他者が、あの病んだ生暖かな肉体とは対極点にある傷一つないようなすべすべした冷やかな彫像そのものに近いのだということも考えねばならない。《*Sur son visage le soleil … posait un masque d'or*¹⁴⁾》という Claude についての Denis の言葉が示すように、この彫像のような他者は、非人間的である上に、強い太陽に照射されている。Serge が《*la chaleur de fruit au soleil qui rayonnait de sa chair*¹⁵⁾》をもっているとしても、この暖かさは、あの辛気臭い生暖かさとはちがって、太陽によっている、つまり太陽光線で殺菌されている。Adrienne は Germaine の部屋を硫黄の粉を燃やして消毒する。

生暖かな肉体に触れることが厭わしく胡散臭いところがあるのは、Green にあっては《*cette chaleur de corps*¹⁶⁾》が生命力を意味せずむしろ死に近づいていく傾向があるからばかりではない。Denis が影で触れることにすら「夢にみるどんなことよりも沃しい」感情を抱くのは、あのオリンポスの神々の像に眼ざしを投げかけたときと同様、あるタブーを犯かしているからなのだ。Serge にそっと触れていた Elisabeth がすぐその後でとらえられる《*Quelle honte si l'inconnu s'était éveillé au contact de cette main curieuse;!…L'idée du scandale qui pouvait s'emouvoir*

d'une telle situation troubla horriblement la jeune fille. Ce qu'elle avait reçu d'éducation lui ôtait le courage de heurter de front la morale établie¹⁷⁾》という感情は、触れることが眼ざし同様に一つの禁止であることを示している。

生々しい肉体をもった現実的存在たる他者は、この「私」を汚染させながらその絶対的な位置から突き落すものでしかない。《Nous sommes au monde d'abord et sur tout par ce contact physique qui répugne à tant de personnages greeniens.¹⁸⁾》《De sorte qu'aucune communication ne puisse s'établir avec autre homme.¹⁹⁾》これら現実的な他者との関係の不可能性は、Green を他者との出発点であったあの眼ざしに突き戻す。

- 1) "Adrienne Mesurat" p. 232
- 2) Ibid., p. 264
- 3) Ibid., p. 300-302
- 4) A. Fongaro, op. cit., p. 45
- 5) J. Sémolué, op. cit., p. 86
- 6) Pierre Brodin: "Julien Green" p. 48
- 7) "Adrienne Mesurat" p. 175
- 8) "Mont-Cinère" p. 166
- 9) La mort reparait, dans le Malfaiteur, sous les traits de M^{me} Pauque. C'est, évidemment, le symbole et l'incarnation de cette hantise de la mort. (P. Brodin, op. cit., p. 61)
- 10) "Moira" p. 208
- 11) "Partir avant le jour" (Grasset)
- 12) J. Sémolué, op. cit., p. 88
- 13) 14) "L'Autre Sommeil" p. 71
- 15) "Minuit" p. 320
- 16) J. Sémolué, op. cit., p. 86
- 17) "Minuit" p. 321
- 18) "Configuration critique de Julien Green" p. 85
- 19) Janine Carrel: "L'expérience du seuil dans œuvre de Julien Green" (Juris Druck et Verlag Zurich, 1967) p. 24

〔Ⅳ〕

眼ざしは、遠くから触れずに、したがって汚染されることなしに他者をとらえる。

囚われ人として Green の人物たちは見る、こと——それもそっと見ること——以外のことは許されていなかった。ある意味で見ると強いられていた。その強いられていた眼ざしが今度は自分のものとして把えなおされる。眼ざしのみが Green にとって他者との好ましい関係となる。しかしこの眼ざしにはいつも危険がつき纏うだろう。

《En se penchant, toutesfois, elle pouvait voir le pavillon des autres fenêtres, mais moins bien… Tout à coup elle entendait des pas qui remontait la rue et tourna aussitôt la tête vers le pavillon. Son cœur se serra. Ce petit homme qui marchait vite le long du mur; c'était Maurecourt. Elle en douta une seconde et se recula instinctivement, craignant d'être vue et le souhaitant de toutes ses forces. ¹⁾》

ほの暗い部屋の奥に身をひそませようとするこの Adrienne の行為それ自体にその危険性があらわになっている。行きずりの眼ざしが窓の眼ざしに気付くということはいつも起りうることなのだ。事実、窓からそっと覗いていた Elisabeth は、研ぎ屋と目が合ってしまう。研ぎ屋は彼女に微笑みさえする。《Un léger signe de tête… envoya le sang aux joues d'Elisabeth, Quelle impertinence! songe-t-elle. ²⁾》 Elisabeth は、近づいてきた Maurecourt や青年を前にして Adrienne がそうであったように、この見返される眼ざしを前にして居心地が悪い。Elisabeth や Denis がそれぞれ Serge と Claude をじっと心ゆくまで見つめることができるためには、Serge も Claude も死んだように身動き一つせずに眠っている必要があるのだ。彼らが眠っているかぎりは見返されることもないであろう。この Serge や Claude と彫像の類似性についてはすでに述べているが、見つめているものにとって彼らが像そのものであったらより好

ましいのかもしれない。そうであれば、Elisabeth や Denis は自分の思いのままに対象を見ることができるだろう。

しかし窓からそっと覗こうと、部屋の暗やみにまるで部屋そのものになるかのごとくまぎれ込もうとも、ときには気まぐれな眼ざしが部屋の壁のような存在に気付くこともあるように、眠っているものはいつでも目覚めて、見ているものを見返す可能性がある。

見返されるとき、彼らは絶対的主体の位置からいきなり客体に転落するのであろう。眼ざしをそそぐとき、その眼ざれているものが、彫像そのものすなわち人間ではなく事物であったらという願いがあらわにしているように、眼ざしを注ぎ返されるとき、眼ざしを投げていた「私」は、その眼ざしの下で、それ自身としてどのような価値もない単なる事物になり変わる。Green の人物たちが、互に相手を対等となるものとしてあるいは共犯者として認めざるを得ない触れ合いというものを受け入れることができないのであれば、《Voir et être vu, c'est encore trop.³⁾》といわれるように、見る、こと、から、見、ら、れ、る、ことへの失墜は、言葉どおり一挙で激しい。これらのことはこうもいえる、他者の眼ざしを逃れながら他者に眼ざしを注ぐには、“Varouna”の第二部において Bertrand Lombard の義妹 Margueritte が彼女の愛の対象をよりよく所有するために家そのものに変身したいと望んだように、自らすすんで対象のまわりにいつもあるような事物そのものになり変るしかないのだと。気まぐれな眼ざししかその事物に気づかない。それ以上にその眼ざしが、行きずりでそれこそ気まぐれであってみれば、その事物はその眼差しの前にありながら、まるで存在しないかのようにいつも看過される。部屋の奥に身を隠しながら一方 Maurecourt に見られたいと思う Adrienne のように身をひそめがちな事物は自らその存在を告げ知らせることはできない。この事物のような存在は全く他者によっている。この存在の在り方と、全てを事物のごとく見なしたいという絶対的主体とは見事なまでに切り裂かれてはいないか。

自分を事物のような存在におとしめることもなく、いつも危険にさらされているこの眼ざしをいかにして完全な主体の方へおしすすめることがで

きるだろうか。

ここで Green にとって見る (voir) がどのような観念と結びついているか思い出してみるのも無駄ではない。

《Imaginer, c'est pour moi, voir des images.⁴⁾》 Green の分身である Denis は《Cette faculté particulière de voir par les yeux de la chair ce que d'autres se représentaient faiblement par l'esprit.⁵⁾》をもっている。夜ひとり目を閉じていると、Guéret の前に Angèle の《la douce et terrible image》が現われてくる。《Il la voyait aussi; elle était étendue un peu en travers de son lit, la tête en arrière, offrant sa gorge au crime ou à l'amour, et ses bras levés comme d'ailes disparaissaient dans le flot noir de ses lourds cheveux. Elle dormait pareille à une morte.⁶⁾》 Guéret は、現実には Angèle を前にしているとき、手がふるえて指輪をはめてやることすらできないのだが、今、そんな病的な意識にとらえられずに、つまり、他者に脅かされることなしに自由にその他者を見ることが出来る。ここに至れば客体は主体にとってどのようにでもなり得るであろう。このイメージのうちにわたしたちは眼ざしの完成されたものを見ることが出来る。

主体が客体に眼ざしを注ぐとは、離れながら自分の思うままに客体を自分のものとして所有することなのだ。というより眼ざしは Green にとって絶対的主体への欲求なのである。

しかし、Green においてイメージが Denis が《La chose imaginée cesse de paraître telle, et revêt toutes les apparences de la matière.⁷⁾》と言うほどのものであるとしてもイメージが内なるものの外在化であれば、その外在化されたものは主体にとって客体——他者に見えようともあくまでも主体に属するものなのであり、あるいは主体そのものなのだ。

Green の人物たちの他者に投げかける眼ざしは、それが絶対的な主体の方へ近づこうとすればするほどこのイメージの性格に侵されている。眼ざしの対象である他者——外的現実には、はじめから眼ざしを投げかける主

体の意識で染めあげられている。ここに Adrienne がそれが可能であるにもかかわらず Maurecourt に会おうとしない理由がある。

Denis は《Je voulais parler et n'y parvins pas.⁹⁾》という他者 (Claude) に対するあの病的意識についていう説明をつけ加えている。《Peut-être sentais-je quel profond désaccord existait entre l'image que je me formait de Claude et les circonstances où nous nous trouvions.》この Denis の説明は、胸の中に「あの Maurecourt の理想的な肖像を思い描いていた」Adrienne の場合にも、そして Angèle のイメージを思い浮べていた Guéret の場合にもあてはまるであろう。Adrienne は自分の見つめている Maurecourt と現実の Maurecourt との間に大きな距りのあることを暗黙のうちに了解していたに違いないのだ。

Green の人物たちの—— Green 自身の主要な関心は閉ざされた世界から逃れることなのだが、例えば Adrienne について考えてみると、距てられながら前方にある Maurecourt はある意味で彼女の忌まわしい状況を鮮明に浮びあがらせるためであった。それに応じて父や姉がその Maurecourt と彼女とを遮ぎる牢番としての姿を表わしていた。しかしそれはまた彼らが打ち倒されるべきものとしてそこに現われということなのだ。他者は好ましいものであらうと忌まわしいものであらうと、予めそのようなものとして出現させられている。そうであってみれば、外的現実には Green の人物たちをいつも裏切るのだが、それは当然裏切るものとしてそこに出現させられている。他者——外的現実が彼らを裏切ったとしても、それは予想通りのことなのだ。《Elle sentit sur ses traits l'expression à la fois morne et défiante qu'elle rencontrait partout autour d'elle, et, sans qu'elle pût s'expliquer comment, cet état d'esprit la reposait...elle préférait... provoquer ainsi dans les yeux des passants des interrogations muettes, presque hostiles.¹⁰⁾》他者の敵意に会ったときのこの Adrienne の奇妙な精神状態——安心感、さらに喜びといった倒錯した感情はこれで説明され得るだろう。彼女は他者のうえに自分の感情を見出しているのだ。

現実存在としての他者は単にそれを見るものの意識に染め上げられているばかりではなくイメージそのものに重なりあうほどまでに接近する。このイメージと外的現実の関係について「日記」の中に次のような記述が見出される。《Je me figurais alors (quand j'avais quinze ans) que le monde extérieur était une sorte de projection de ce que je sentais en moi et maintenant encore cette pensée m'effleure.¹¹⁾》このように外的現実が内なるものの外在化——その反映というイメージそのものの性格を帯びるのであれば、それは見ているものに彼の内なるものを告げ知らせる鏡の機能をもつ。Green は“L'ennemi”について《L'ennemi est pour moi un très grand enseignement. C'est un miroir.¹²⁾》と述べているが、このことは作中人物についてもいえることなのだ。周辺的存在は事物的存在として、事物がその所有者の鏡になるように、それに眼ざしを投げる中心的存在を映し出している。《Il (Green) nous montre les choses et les gens non seulement il les voit comme ils sont devant autrui et comme ils apparaissent en face de leur miroir.¹³⁾》という指摘は、鏡と他者(外的現実)の類似性ばかりでなく Green の作品における鏡そのものの存在を示唆している。わたしたちは Green のロマンのいたるところで眼ざしに出会ったように鏡を見出すことができるだろう。鏡は単に方法的に——たとえば Hedwidge の《ces beau bras ronds, …cette poitrine d'une blancheur et d'un galbe si pur, ces flancs¹⁴⁾》を示すために使われているのではない。《Devant ce miroir … Un irrésistable besoin de se voir le porta près de la cheminée¹⁵⁾》という Phillipe についての記述から類推してほしいのだが、彼も含めて Green の人物たちは、窓の方へ引き寄せられたようにたえず鏡に引きつけられている。鏡は Green の人物たちと全ゆる意味で深くかかわっているのだ。孤独な人々は《Elle disait à cette femme dans la glace qu'il fallait agir ou mourir.¹⁶⁾》というように鏡の中の自分に語りかけ、そこで自分を確認しようとするだろう。しかしここではイメージというものがそうであるように、他者はどのようにしても問題

にはならない。

《L'acte de voir comporte un échec fondamentale.¹⁷⁾》ということなのであり、他者に投げかける眼ざしは、その表面にそっと触れるように見えながら、それ以上は他者を把えることはできない。Adrienne や Elisabeth は背を向けて逃れ去る他者を追いかけていったが、追いつけずつねにそれと距てられていたように、眼ざしがどンドン前方に延びて行こうとも、眼ざされるものは、眼ざしの下で滑り、たえず前方に逃がれ去る。眼ざしは他者の表面を滑り、その表面を掩う。他者は「私」の眼ざしに掩われてしまう。その他者は、見かけの他者であり、「私」の影、「私」の映像にすぎない。眼ざしは他者の表面を空しく触れて、見ている「私」の方へ跳ねかえってくるだろう。

鏡の中の「私」が、それを見ている「私」を見ている。Elisabeth はあの冷たい彫像のような Serge に眼ざしを投げると同時に自分の身体にも眼をやるだろう。《Elisabeth considéra vaniteusement sa poitrine où l'eau mettait un reflet d'argent. Personne ne lui avait dit encore qu'elle était belle et elle le découvrait elle-même avec une émotion singulière.¹⁸⁾》薄明の中に白く浮び上り、冷たい水を銀色に反映している Elisabeth の裸体は、蒼白い月の光で湯浴みする Marie-Thérèse そのままである。《Je m'étendis ensuite sur le sol, le ventre et le haut des jambes baignés d'une lumière complice...Je ris toute seule du bien-être que je ressentais, me roulant sur le tapis comme un jeune animal.¹⁹⁾》誰もがここに自己との全きかかわり合いであるナルシズムを見い出すだろう。しかしこの水の冷たさ、冷たい月の光と結び合わされている彼女たちの裸体があの他者としての彫像に似ているという必要があるだろうか。眼ざしのかぎりない反映。それは全く他者とかかわりない自己のかぎりない反映。Greenにとって、鏡の中の像、イメージ、外的現実が一つのことであれば、《Ce rêve m'instruit mieux sur ma nature...Je sus que j'étais voué aux sens.²⁰⁾》と Denis の言うように、生暖かさを拒否している冷たい彫像のような裸像としての他者は、そ

れに眼ざしを投げているものに彼が「官能にささげられた身であること」を知らせる。Jean Starobinski の言葉を借りれば《Voir, C'est donc éveiller en soi-même le spectacle désiré²¹⁾》

生暖かな肉体に触れることが反射的に忌避されるからには、つねに引離されている眼ざしこそが Green における欲望の形式であることが明らかになる。その眼ざされるもの、冷えびえとした彫像そのものが彼にとってただ一つ可能な欲望の対象なのだ。Green においても『死んだように横たわっている女』というテーマが一度ならず見出される。その中で, Manuel の腕の中にいる子爵夫人が一つの頂点になっている。《Cependant le corps pale et froid de ma maitresse se refermait lentement sur le mien, pareil à ces fleurs monstrueuses dont on dit qu'elles emprisonnent l'insect qu'attire la douceur de leur parfum. Ces pieds se rejoignirent derrière les miens et ses bras sous ma nuque; je sentis alors comme brûlure la fraîcheur de cette chair. Au plus fort de la volupté, j'eus l'impression de me débattre et de réchauffer une morte dont l'inflexible étreinte ne se desserrerait pas. Cet enlacement glacial me fit savourer la terreur au cœur même du plaisir et ce qu'on appelle l'inverse des sens ne m'empêcha point de comprendre que j'étais la proie et non le maître, ...le corps baigné de sueur, je tâchai de me libérer, mais ici commença un long et singulier supplice, car celle qu'à bon droit j'appelle ma maitresse employait toutes ses forces à me retenir. L'horreur qu'elle m'inspira dans cet instant ne peut s'exprimer. Assouvi, dégrisé, tremblant encore des efforts que j'avais fournis, je luttais pour arracher ma chair de sa chair, mais on eût dit qu'elle se soudait à moi et mon corps se tordait en vain dans l'étau de ces membres qu'animait par intervalles une sorte de fureur spasmodique. Pour reprendre haleine, je cessai de me débattre et demeurai immobile; elle attendit, les yeux révulsés semblable à une noyée qui s'a-

grippe au nageur et l'entraîne de tout son poids vers le fond de la mer, …Je roulai sur le tapis avec mon abominable fardeau, quand brusquement elle ouvrit le bras et son corps détendu quitta le mien comme pour tomber dans le vide. … Elle était morte²²⁾》この冷たく死せる子爵夫人のイメージに、「冷たい女の極限は屍体である。」という Sartre の言葉(“Baudelaire”)をそのまま当てはめることができるだろう。あの非人間なまでに美しい冷ややかな裸体と事物にすぎない彫像そのものとの親近性については前に述べたが、それはまず共に暖かさを奪われていることによっているのであり、死に近づいていくあの病んだ肉体の方が、なお生命を感じさせていた。冷たさは「死という真の風土」に属しているのだ。Green は生暖かな肉体のまわりに漂う死を遠去けながら一方では死をまねきよせていたことになる。このことは確かなことなのだけれど、注意しなければならないことは、Green においては、この美しい彫像のような裸体は、その冷たさによって死に結びつけられているというよりも、子爵夫人の「虚無の中へでも落ちていく」というイメージが示唆するように死の深淵に後ろざまに落ちていくことによってなのだということである。死はやはりイメージに投げかける眼ざしを通じてやってくる。Green 自身が“Partir avant le jour”の中で語り、そこから多くの人が、たとえば《L'idée de beauté corporelle se liait à celle de malédiction²³⁾》と結論しているように、この完全な美しさに達している裸像も呪わしく、罪あるものなのだ。ある意味で相反する極にあるようなこの二つの要素は J. Sémolué の言葉を借りれば Gustave Doré の“L'enfer de Danté”など媒介にしてこう結び合わされている。《Les réprouvés sont nus…Qu'il était beau, le réprouvé!²⁴⁾》

しかし冷たさと落下だけがこの美しい裸像に死を招きよせているわけではない。Green において眼ざしはすでに述べたように特権的な位置を占めている。この特権的な位置はまた Denis のいう《ce don de voir》《une bizarrerie de mon esprit de ne croire à une chose que si je l'ai rêvée²⁵⁾》に裏づけられ、支えられている。《cette espèce de vue inté-

rieure, ce regard aigu et avide²⁶⁾》は Denis の独占物ではない。
《Voir cette femme, pour M. Fruges, revenait presque à la toucher. Son regard se posait sur elle comme une main.²⁷⁾》イメージは眼ざされることにより事物そのものになり、その固体化されたイメージそして外的現実も、離れていながら眼ざしに触れられる。Jean Starobinski のいう魔術²⁸⁾は、J. J. Rousseau にばかりでなく Julien Green にも起るのだ。離れながら触れるうえに、さらに注意深いことに、その触れられるものが死体のように冷たいのだから、汚染されるはずがない。しかし魔術の力は魔法使いを裏切ってしまう。《Dans l'émerveillement du désir, je m'enhardis à toucher ces membres à les entourer de mes bras, et sur ces visages sans regard et ces poitrine où rien ne battait, je portai des mains tremblants.²⁹⁾》という Denis のように、触れれば、この傷一つなくすべすべした美しい裸像は、どんなに冷ややかであろうと、この眼ざしの手の下で温もりをもつかもきれないのだから。Manuel が《j'eus l'impression...de réchauffer une morte》と述べていることを忘れないようにしよう、同時にあの長々と引用した暗く美しく恐ろしい情景が Denis と同じように《le don merveilleux de voir les choses telles qu'elles ne sont pas》をもつ Manuel 自身の中にしかないイメージであることも。眼ざしを投げかけられた冷たく美しい裸像は、黒々とした死の深淵に沈みゆきながら、眼ざしているものを離れたままに把え「泳ぎ手にしがみつくと溺れた女にも似て、彼をその全ての重みをもって海の底にひきずりこもうとする。」眼ざしの魔術はこのように眼ざすものと眼ざされるものとを触れ合わせ結びつけるだが、この魔術がそれらしくあればあるほど、眼ざしはみるみるうちに沈んでいく冷たく光る彫像のような裸体を追いながら落下していく。触れ合いがそうであったように、(この Manuel と子爵夫人の例は Green における触れることへの恐怖とそれをあえて試みることもたらす眩惑とをもう一度それももっとも鮮明な沃しい光の中で確認してはいないだろうか。) 眼ざしまでも恐怖を掻きたてる。《L'érotisme engendre la souffrance, l'hor-

reur, la mort³⁰⁾》といわれるように、死と愛の結合という古典的なテーマが眼ざしのうちに確かめられる。Green にとって欲望を象徴する冷ややかな裸像に眼ざしを投げかけることすら不可能になる。そしてその裸像が他者を代表しているからには一般的にいて他者に眼ざしを注ぐことすら不可能になる。窓の外に開かれた世界は《C'est par la fenêtre que la petite de Minuit (Elisabeth)…est sortie de la vie, qu'elle s'est jetée dans le vie.³¹⁾》といわれるように、死に向って開かれた世界なのだ。

眼ざしそのものもつ他者への不可能性は、眼ざされた(見かけの)他者の呪わしい状況によって裏付けられている。Green においてこのように全ての意味においての他者との関係は不可能であろう。

黒々とした深淵に沈んでいく、あの美しい彫像のような裸体が、鏡に映っている「私」の像だとすれば、それが引き起こす倒錯した喜び、それに入り混った死の恐怖も全て、他者ではなく、この「私」の問題なのだ。

- 1) “Adrienne Mesurat” pp. 91-92
- 2) “Minuit” p. 154
- 3) Jean Starobinski: “L’Œie vivant” (Gallimard) p. 21
- 4) “Journal (1928-1958)” p. 664
- 5) “L’Autre Sommeil” p. 55
- 6) “Léviathan” p. 96
- 7) “L’Autre Sommeil” p. 55
- 8) 9) Ibid., p. 62
- 10) “Adrienne Mesurat” pp. 287-288
- 11) “Journal” p. 756
- 12) Ibid., p. 931
- 13) P. Brodin, op. cit., p. 49
- 14) “Malfaiteur” p. 80
- 15) “Epaves” (Plon) p. 59
- 16) “Malfaiteur” p. 208
- 17) J. Starobinski, op. cit., p. 86
- 18) “Minuit” p. 243
- 19) “Le Visionnaire” (Livre de poche) pp. 49-50

- 20) “L’Autre Sommeil” p. 31
- 21) J. Starobinski, op. cit., pp. 114-115
- 22) “Le Visionnaire” pp. 221-223
- 23) J. Semolué, op. cit., p. 43
- 24) Ibid., p. 50
- 25) “L’Autre Sommeil” p. 55, p. 29
- 26) Ibid., p. 56
- 27) “Si j’étais vous…” (Oeuvres complètes) pp. 382-383
- 28) La magie qui établit à la fois distance et le contact, réalisant le miracle d’un contact à distance. (J. Starobinski, op. cit., p. 112)
- 29) “L’Autre Sommeil” p. 35
- 30) P. Brodin, op. cit., p. 73
- 31) Philippe Sénart: “Chemins critiques” (Plon, 1966) p. 43